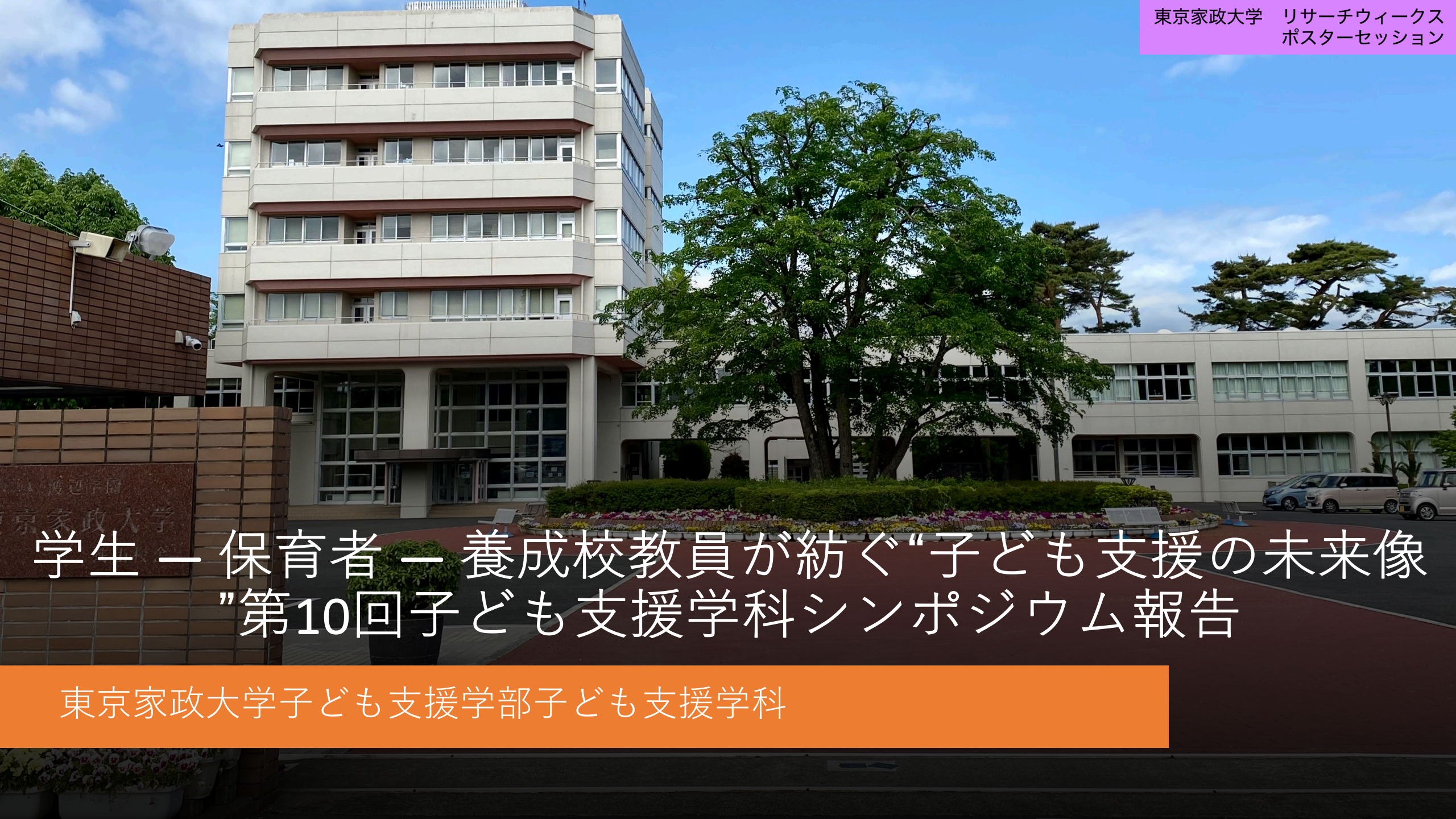


学生 ー 保育者 ー 養成校教員が紡ぐ“子ども支援の未来像”第10回子ども支援学科シンポジウム報告

東京家政大学子ども支援学部子ども支援学科

趣旨説明

- 2023年度は、子ども支援学科開設10周年の節目となった。本学科では、開設当初より、「多様な支援を必要とする子どもを含む全ての子どもの可能性を広げる保育実践ができる」保育者の育成をディプロマポリシー（以下、DP）としているが、これらに対して、学科では達成度アンケート等により各学年終了時に各学生の学修到達度を検証している。
- しかし、本年度の学科シンポジウムでは、学生自らが主催者となり、卒業生OGの発題を踏まえ、本学科３、４年生全員が、これまでの自分たちの学びを振り返り、目指すべき本学科の姿と現実的かつ具体的な課題等を見出していくディスカッションを試みた。
- 本報告では、学生･OG･教員全員が「子ども支援学科の未来像」について見つめ、探究することで、子ども支援学科にしかない魅力”を自覚し、誇りを持って発信していくための試行的なシンポジウムとなった内容を報告する。

2023年度第10回子ども支援学科シンポジウム
学生 ― 保育者 ― 養成校教員が紡ぐ“子ども支援の未来像”

日時：2023年　10月　21日　（土）　9:30　～　12:00

会場：東京家政大学狭山キャンパス６号館16.17講義室

次第

9:30　開会挨拶　子ども支援学部長
9:35　学生発題
9:55　話題提供1　N..K.さん　肢体不自由児施設勤務（本学科３期生）
10:10　話題提供2　H.M.さん　保育園勤務（本学科２期生）
10:25　話題提供3　K.M.さん　小児科病棟勤務（本学科１期生）
10:40　休憩
10:50　学生との対話（グループディスカッション）
11:45　まとめ・結語
11:50　子ども支援学科長からのことば

学生による問題提起

- このシンポジウムでは、子ども支援学科のこれまでとこれからを見渡して、しっかりと現状と課題を直視し、本学科の本当の魅力とあるべき姿を探っていくことを目的として開催いたしましたが、まずは本学科の卒業要件であるディプロマポリシーを確認しながら当事者である学生の認識と、本学科の特色である3本柱に基づいたカリキュラムとそれに基づく実際の教育内容などを改めて見つめてみたいと思います。
- ディプロマポリシーに現実の私たちは、どの程度到達しようとしているのか・していないのか、課題があるとしたらどのようなことがあり、それをどのようにしていったらよいかなど、まずは考え合って参りたいと思います。

保育者・保育者養成を取り巻く背景

1．保育職を目指す次世代の減少

- 保育士というと、ついこの前までは子ども達に超人気の職業でした。しかし、2022年、2023年の「小学六年生 将来就きたい職業ランキング」[1)]では、男女総合の結果ではありますが、2022年度には10位にランクインしていた保育士が、2023年にはかろうじて今年はついにランク外になってしまいました。
- また、小学生女子の「なりたい職業ランキング」では、2020年から23年までのデータが示されていますが、幼稚園教諭・保育士以外の職業は毎年順位がバラバラであったりしています。
- 例えば、2022から突然ランクインして順位をあげているyoutuberなどとは相反し、幼稚園教諭・保育士は、残念ながら右肩下がりで順位が下がる傾向になっていることがわかります。

1) 株式会社クラレアンケートhttps://www.kuraray.co.jp/enquete/2023_s6

保育者・保育者養成を取り巻く背景

２．保育者養成校志願者数の減少

- また、全国の保育士養成校の入学者数推移の資料[2)]からは、日本中の大学、短大、専門学校の保育者養成校では、これまで毎年4万人ほどの保育者を輩出してきています。
- しかし、保育者養成校には、2016年では定員数に対して80％の入学者がいたものの、2020年になると75％程まで下がっています。直近の数字までは把握できておりませんが、今年度の2023年度入学生となると、さらに下がってきていることが考えられます。
- 先程のなりたい職業ランキングの項目で、「保育士」の順位が年々落ちたり、ランク外になってしまったりしていましたが、このままでは、今の小中学生が高校・大学生になる頃には、さらに保育士養成校の定員充足率や入学者数が下がってしまうことが懸念されると思います。
- ただでさえ定員が満たされていない今、更に減り続けているという状況は「保育職」に対するネガティブイメージが、実際の現実を越えて、悪いイメージが増幅し世間で広まっているからではないかと考えられます。

2)　保育士の現状と主な取組　厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000640835.pdf

DP、CPに対する達成度の検証

- ここで、私たちの子ども支援学科のDPと、CPについて見ていきたいと思います。子ども支援学科に入学したときから、学生の皆さんはお聞きしていたかと思いますが、あらためて子ども支援学科のDP、つまり本学科の「卒業要件」を確認いたします。本学科のDPには、「多様な支援を必要とする子どもを含む全ての子どもの一人ひとりを深く理解し、持てる可能性を引き出すための的確な保育実践ができる保育専門職者として、社会に貢献しうる能力を獲得した学生に対して学位を授与する」と定めています。
- DPは、大きいカテゴリーが３つで、１つは知識・技能、２つ目に思考力・判断力・表現力、３つ目は主体性・多様性・協働性です。
- 上記はすべてが卒業要件であり、一つ一つの末尾が「〇〇できる」という述語で終わっています。つまり、これらがすべて「できる」ようになって始めて卒業証書が授与されるということですが、逆に言えばできていなければ、あるいは達成していなければ、厳密には「卒業できない」ということです。

子ども支援学部子ども支援学科ディプロマ ポリシー（全文）

多様な支援を必要とする子どもを含む全ての子どもの一人ひとりを深く理解し、持てる可能性を引き出すための的確な保育実践ができる保育専門職者として、社会に貢献しうる能力を獲得した学生に対して学位を授与するものとします。

【知識・技能】

- グローバル化、また多様化する現代社会において、新たな時代に必要となる教育・保育の質向上に資する知識を身につけている。
- 我が国における子ども・子育て支援制度、教育要領、指針などについて理解し、教育・保育の計画を立てることができる。
- 乳幼児期の子どもの発達の特性を理解し、一人ひとりの健やかな育ちと資質・能力の育成を目指した保育活動を展開できる。

【思考力・判断力・表現力】

- 教育・保育に関わる様々な理論や既存のデータに示される根拠に基づきながら、子どもの最善の利益を考えた保育内容を考慮し，行動することができる。
- 子どもの自発的な遊びを育むために必要な環境の構成と適切な援助について、広い視野を持って実践することができる。
- 子どもの多様性を理解し、一人ひとりの豊かな可能性を引き出し、子どもの代弁者となれる保育者を目指して、研鑽を積む姿勢を身につけている。

【主体性・多様性・協働性】

- 「自主自律」に基づく判断力、自己評価をはじめとする自己調整能力と行動力を身につけ、質の高い保育を実践するための探求力を持って行動できる。
- すべての子どもへの配慮を考え、園・家庭・地域社会との協調・協働の重要性を理解し、多様な教育・保育のあり方を探求することができる。
- 特別支援教育領域、健康保育領域、子ども芸術・文化領域に関する知識や技術を学び、様々な環境や状況の中にある子どもへの保育を実践をすることができる。

３年自己評価（DP達成度）

これらのディプロマポリシーについて、ご自身でしたら、現時点でどの程度達成できていると思いますか。
和田ゼミ3年生は、このような低い結果となりました。また、その結果の理由として「的確な保育実践がすぐにできる自信がない」との回答もあります。これらのように、私たちの学びは実践につなげる機会が少なく、全ての子どもを支援できるようになるための学びは、まだまだ足りないと思っています。

学生A→35％：子どもの今の姿から保育者としてやらなければならないことを見出せない　→　実践の不足

学生B→55％：的確な保育実践がすぐにできる自信がない。→　実践の不足

学生C→40％：大学での学びを保育実践の場に繋げられるイメージが湧かない
→　実践の不足

学生D→45％：実践的な学びが少なく、実際の現場で生かすことが難しい
→　実践の不足

学生E→50％：多用な支援を必要とする子の中でも多国籍の子への支援が分からない
→　多国籍の知識・実践不足

４年自己評価（DP達成度）

一方で、4年ゼミ生の現状はこのようになりました。3年生の結果とは少々異なりますが、やはり保育の一定の分野での学びが乏しいこと、実践的学びの不足、そして知識・技量の不足からくる自信のなさや不安なども挙げられました。

学生A→60％：特別支援やグレーゾーンの子どもに関する勉強が足りていない
→　知識・技量不足
子どもの基礎理解があっても、実践で活かせる気がしない
→　知識・技量不足に伴う自信不足

学生B→65％：地域社会との協調・協働の図り方がわからない。多国籍の子どもに対応できる自信がない。→実践・知識不足に伴う自信不足

学生C→60％：文化や言語等も含めた「すべての子ども」の多様に応じて、可能性を引き出しすための知識・実践が培えていない
→ 実践・知識不足に伴う自信不足

学生D→60％：現場経験が実習程度の為、まだまだ経験が足りていない
→実践・知識不足に伴う自信不足

今後の取り組むべき課題

3，4年ともに、大きく「知識不足・実践不足」が挙げられることとなりましたが、実践と知識をつなげられる機会が少ないという課題を解決するためには、具体的にこのようなことが必要なのではないかと考えました。

実践と知識をつなげられる機会が少ない

・**講義内で学んだこと**（ロールプレイングや読み聞かせ等）を実際に子どもを相手にして行う

・**学生自身で**より積極的に自分で実践の機会を作り
　現場の保育に参加する必要がある
→森のおうちのボランティア
　森のアートクラブ
　学内掲示のボランティア、アルバイト活用！！

子ども支援学科　カリキュラムポリシー

さて、次は、本学科のカリキュラムポリシーについて考えてみます。

カリキュラムポリシーは、「子どもの存在そのものをまるごと受けとめ、**健常児・支援を要する子も、文化・国の違いも、すべてを乗り越え、それぞれの子どもたちがもって生まれた可能性を実現できるような支援、**に関わる知識と技量を身につけます。自然豊かで、身近に子どもたちが楽しく遊び、生活する保育実習環境のもとで、4年間を通して充実したスタッフや同じ目標を志す仲間とともに学修します」とされています。

そして、これらを具体化するために、「健康保育科目」「特別支援科目」「子ども芸術・文化科目」の３領域に特化した特徴的学びをいわゆる３本柱として掲げており、学生の希望に応じて選択出来るようになっています。

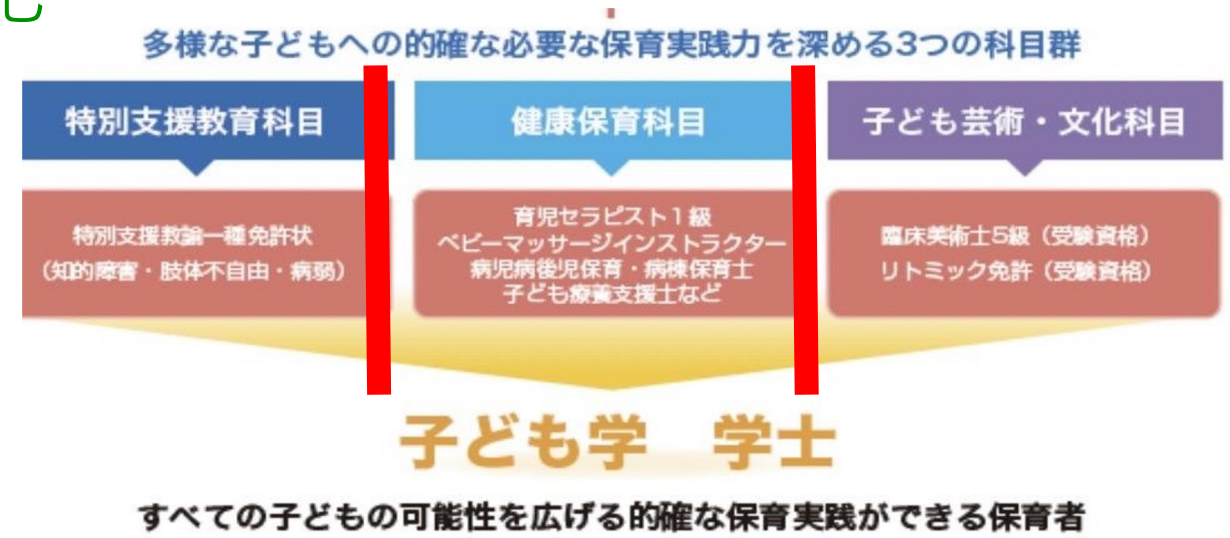
現　状

「文化の違いも国の違いも、すべてを乗り越え、それぞれの子どもたちがもって生まれた可能性を実現できるような支援に関わる知識と技量を身につけます」

→　文化の違いや他国の子どもの支援を学べる授業は少ない・・・

・三本柱の縦割りによる孤立化

縦割りで偏って
しまっているので
はないか!!



見直しの方向（案）

- 実際、学生は最初から働く場を自ら想像・特定し学んでいます。しかし、それによって３つの領域の学びが偏って孤立化してしまいがちです。
- 学生は３本柱に特徴のあるカリキュラムを生かすために、もっと広い視野を持ち、まんべんなく学ぶべきではないかと思います。日本中の保育者養成校の中でこの子ども支援学科にしかない、これら３本柱をすべて学べてこそ、すべての子どもの支援ができるようになっていくのではないのでしょうか。
- また、３本柱のなかでも、とりわけ特別支援教育に特化して偏りすぎている面があるとも思います。本学科のカリキュラムで特別支援教育の学びが用意されているのは、必ずしも特別支援学校で働く教員の免許状をとるためだけのものではないはずです。
- 本来は通常の保育現場において、特別な支援を必要としている子ども、に対応できる、そしてそうした子どもも、そうではない子どもも、一緒に育ちの支援の実際を学ぶというのが、この学科の本来の理念なのではないでしょうか。そうであるならば、そのための知識や技術の学び、とりわけインクルーシブ保育などについては、はたして今のままで十分かどうかという問題と、特別支援学校、教員免許状の取得に偏り過ぎているという実態問題の二つの側面があると私たちは思っています。

学生による学生アンケート結果（回収率89.2%）

学生が子ども支援学科の現在をどのように感じているのか、アンケートを取りました。おかげさまで回収率は、なんと89．2%でした！
アンケートでは、まず１番目に「今までの大学生活での学びを一言で言うと！」という質問をしました。最も多かったのは、「将来・未来・保育士への道・夢」であり、75人もの方が答えていました。その他にも多かったのは、「成長や挑戦、学びや努力」などでした。全体としては、前向きなワードが多かったように感じます。

①今までの大学生活での学びを一言で言うと！最も多かったのは、
将来・未来・保育士への道・夢

その他にも
成長　挑戦　学び
経験　努力

②今までの大学の授業や教科目の中で、『有意義だと思う！！』ものに１位から３位までランキングをつけるとすると？

1位　情報機器の操作
2位　体育(実技)・子どもの理解と援助　(同率)
3位　保育実習Ⅰ(保育所)
4位　ゼミナール・卒業研究
5位　スタートアップセミナー
6位　教育実習（幼稚園）
7位　保育実習Ⅰ(施設)
8位　保育実習Ⅱ（保育所）
9位　手話・子どもの音楽ⅡⅣ・小児の感染症と免疫学・特別支援実習（同率）
10位　子ども学総論・子どもの音楽Ⅰ・障害児保育演習・子ども芸術ⅡⅢ
保育実習指導Ⅱ・教育実習指導（幼）（同率）

２番目に、今までの大学の授業や教科目の中で『有意義だと思う！！』ものに１位から３位までランキングをつけるとすると？という質問をしたところ、1位情報機器の操作、2位体育（実技）・子どもの理解と援助、3位保育実習Ⅰ（保育所）という結果になりました。
これらからは「カリキュラムポリシーで大学側が掲げている学びの方向性」と「学生が受け取っている学びの実感」には、すれ違いがあるのではと感じました。たとえば、3本柱に該当する科目は、なんと最上位でも9位なのです。

③講義の内容、カリキュラム編成で、教員または大学に向けての意見や疑問点（満足・不満どっちもOK）

３番目に、講義の内容、カリキュラム編成で、教員または大学に向けての意見や疑問点について、質問しました。回答が多かったため、一部のみ抜粋しますが、実習関係について、実践として行うことで知識に結びつけることが出来たという意見や、事前の授業で実習に関するマナーをもっと学びたかった、などという意見が多く見られました。

実習関係・色々な実習を経験することができたので、大学の講義で得たものが知識で留まらず、様々な学びをつなぎ合わせて実践力として身につけることができた（+）・実習事前指導の授業（施設、保育所、幼稚園）は基本的な社会マナーや言葉遣いなどについてもっと知りたかった（－）

造形・造形の講義で、様々な表現方法を学ぶことの大切さを理解できた（+）

ピアノ・ピアノ初心者の学生にとっても、とても将来に生かされる授業であると感じた（+）・子どもの音楽では実際に実習の時にも歌っていた歌などを練習することができてとても役に立った（+）

特別支援・特別支援系の講義はいつも知らないことばかりで学びを感じた（+）

カリキュラム

・すべての講義がより多方面で保育者として活躍出来るものだと思った（+）
・もっと乳児のお世話についての実技の授業をやりたかった。（ー）

講義方法

・VTRを見る授業はより分かりやすいと思った（+）
・座学も大切だが、実習までにもっと実践に近い学びがしたい（手遊びなどもふくめ）（ー）
・授業のレジュメはマナバに載せるだけでなく配布して欲しい。
　もしくは、コピー用紙の補助が欲しい（ー）

実践的な学び

・つくしやもりのおうちでのボランティアができる（+）
・手遊びやベープサートなど、実践的な授業がもっと増えればいいと思う（ー）

履修の方法

・一コマのために学校に行くのが大変。一日にできるだけ授業をまとめてくれたらとても精神的にも身体的にも負担が減る。平日の帰りが遅くなっても良いので土曜授業は無くしてほしい(－)
・基礎実習で施設に興味をもったため、3年の実習で施設に変更したいと言ったができなかった。実習をしないと分からないこともあるため、柔軟性がほしい（ー）

④この大学で学生生活を過ごした中で教員または大学に向けての意見や疑問点（満足・不満どちらでもOK）

授業関係

- フリースペースが夜の10時まで空いているのがとても便利で、試験前や長期休みにも大学に来て勉強することができた(＋)
- 急な講義が入った際や休校の際の連絡をもう少し早めに入れてほしい(－)
- 一年生の頃から時間割を自由に組みたかった(－)

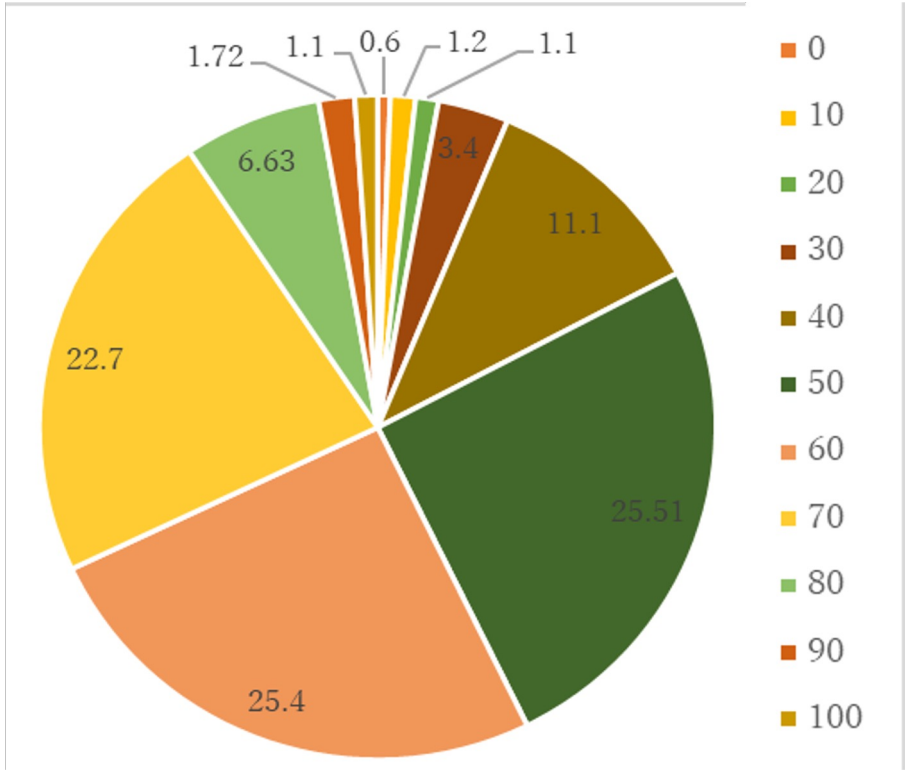
教員・学務課関係

- 学務課からの教養講座は、新たなことを学ぶことができた(＋)
- 学務課、教員、実習指導室の連携がされてないと感じることがあった(－)

ピアノ関連

- ピアノ室が自由に使えて嬉しい(＋)
- 試験前になるとピアノ室がいっぱいになってしまって　練習することができない(－)

⑤あなた自身が卒業までに『多様な支援を必要とする子どもを含む全ての子どもの一人ひとりを深く理解し、持てる可能性を引き出すための 的確な保育実践ができる保育専門職者』になれる可能性は何パーセントくらいとお考えですか？



最後に、ディプロマポリシーに直結する質問に対して、図のような結果が得られました。
人それぞれ数値は異なり、全体的にばらつきがみられることとなりましたが、その中でも、50％～79％と回答している人の割合が、全体の七割を超えており、「的確な保育実践ができる保育専門職者」になっていけると考え、あるいはなろうと考え、その意味では志を持って日々学んでいる結果であろうと思います。
しかし、学科のカリキュラムや、実際の日々の学習内容自体には、課題や不安も多く感じているため、卒業して働き始めてからは、「多様な支援を必要とする子どもへの保育」の実際場面などにおいて、理想と現実とのギャップを感じたり、技量不足により壁にぶつかってしまったりする可能性は大いに考えられるかと思います。

子ども支援学科の未来

冒頭にもお話した通り、保育者養成校に進学を志願する高校生は急激に減ってきています。
しかし、たとえどんなに志願者が減ってきたとしても、保育者の必要性が社会からなくなるということはなく、まして保育という仕事が価値あるもので魅力的であるということには変わりはありません。
こうした減少傾向であればこそ、質や中身こそが大事で、ホンモノの価値ある保育者養成校であるならば、本気で保育を学びたいという高校生や志願者がこの狭山に集まってくるのではないでしょうか。
私たちは、まさに今こそ、この子ども支援学科ならではの存在意義を打ち出し、まだまだ埋もれているかもしれない魅力をも掘り起こして、社会に全国に発信にしていきたいと思っています。

毎年4万人近くの保育者を輩出傾向しかし、保育者養成校に進学志願は激減
→短期離職や潜在保育者の構図を変えられていない

★「カリキュラム、学習内容、卒後の生き方」で差別化を図る必要がある
→かせい森のおうち、かせい森のクリニック、デイサービスつくし　など
　をもっともっと活用していくべき！

★大学側に求めるばかりはNG
→学生も今一度ここでの学びの成果や意義について見つめ直し、将来、母校が
　誇りを持って自慢できるような大学を目指し、大学生活を送っていきましょう！

本学科の
強み！

OGからの話題提供1
N.K.さん（３期生）　肢体不自由児施設勤務

＊本シンポジウムの実際では、OGの現在の職業の紹介や職種の専門性等の発表もありましたが、本報告では、学科DPに関わる提供のみを抜粋しています。

子ども支援学科の3本柱で学んだこと①

「子ども支援」～幼稚園教育実習・保育実習～

◆発達年齢に応じた言葉かけやヒントを与える力

◆個を大切にし、認めたりほめたりする優しさ

◆些細な変化にも気づくことのできる観察力

◆子どもと共に成長していく力

◆子どもたちを惹きつけられる笑顔の重要性

子ども支援学科の3本柱で学んだこと②

「特別支援教育科目」～特別支援学校教育実習（2週間）～

- 一人ひとりの障害特性を理解し、性格や家庭環境などの背景にも目を向けて個別指導計画を設定する技能
- その子に不足している経験は何かを考え、成功体験を増やして自信アップへと繋げる力
- 自分のクラスや担当だけでなく、学校全体を全員で見ていく視野の広さ　→信頼関係構築に繋がる！
- コミュニケーション、意思の表出は言葉だけではない
  表情・目の動き（視線）・反応を読み取る力

子ども支援学科の3本柱で学んだこと③

「健康保育科目」～健康保育実習～

◆看護師と連携して子どもたちが安心できる場を提供するための基礎

◆看護師、保育士の互いの専門性を共有し、生かしながら成長し合えるということ

◆感染予防の徹底や看護に関する知識

「子ども芸術・文化科目」～リトミック～

◆表現に正解はないということ　自分の思うままに、感じたままに表すことの楽しさを大切に、
　それを共有することで他者の気持ちに寄り添ったり、触れたりすることができる。

◆感性・表現力の豊かさ

◆羞恥心の排除　自分自身が一番に楽しむことが大切。自然と周りもついてくる。自分の知らない自分に出会える。

大学での学びが今どのようなことに生きているか

◆肢体不自由児理解　～肢体不自由児の心理・生理・病理～

【肢体不自由児者とのコミュニケーションにおける困難さ】

- 意思を相手に伝えられない
- 言語による理解
- 受け身になることが多い

↓

コミュニケーションの手段は言葉以外にもたくさんある！

表情　目の動き（視線）　反応　ジェスチャー

【肢体不自由児者とのコミュニケーションにおける工夫】

①視覚情報の活用

- ●目で見て選択できるようにする（衣服や飲み物など）
- ●ジェスチャーで伝える

②わずかな変化を読み取る

- ●選択肢を出したときの視線
- ●口角の状態
- ●発声

寄り添い思いを汲み取ることが大切

◆思いやりの心　～各種実習～

相手を尊重し、「ありがとう」や「ごめんなさい」を素直に言えるということは大切なこと。たとえ言葉でのやり取りができなくとも、きちんと言葉で伝える。言葉にすることで表情からも伝わる。

◆自らが楽しむ姿勢　～各種実習～

自分自身が楽しみながら行動することで、周りを巻き込んで良い。雰囲気づくりに繋げることができる。不安な気持ちも周りに伝わってしまう。

子ども支援学科を振り返って

子ども支援学科の課題

- 他学科との合同授業

現場では、同じ幼稚園教諭や保育士だけではなく他職種と連携しているため、学生のうちからいろいろな分野の人と関わることは大切だと考える。

- 板橋キャンパスとの交流

家政大には、同じ保育や教育を学んでいる学生が多いため、お互いの学科のよさや強みなどを共有できる機会があれば高め合えるのではないか。

子ども支援学科を振り返って

資格・免許をどのように生かしているか

保育士

- 利用者一人ひとりの発達年齢に応じて関わっている。
- 利用者が安心して生活ができるように、環境を設定している。

幼稚園教諭

- 基本的生活習慣を身に付けさせる。
- 運動や音楽、遊びを通して様々な体験をする機会を提供する。

特別支援学校教諭

- 一人ひとりの障害特性を理解し、必要な個別支援を行う。
- 非言語コミュニケーションを活用する。

子ども支援学科を振り返って

３本柱・ディプロマポリシーについて

- 利用者の多様性を理解し、一人ひとりの豊かな可能性を引き出すよう努めている。
- 代弁者となれる保育者を目指して、担当利用者の抱える困難さや今後の課題について、担当看護師と連携しながら模索している。
- すべての利用者への配慮を、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、介護福祉士、保育士などと情報共有しながら日々検討している。

保育士の専門性の発揮 ＋ 他職種とのチームワーク

子ども支援学科を振り返って

子ども支援学科で学ぶ皆さんへ

◆早い段階から将来の選択肢を絞るのはもったいない！
保育士の仕事は子ども相手だけではない。
大学で学ぶ保育学が障害者支援にも生かせる。
進路選択にあたっては、幼稚園、保育園に限定せずに情報を集めていくことで、いろいろな可能性が見えてくる。

◆大学から紹介されるボランティアには積極的に参加を！
実際に現場へ出てみることでしか得られないことはたくさんある。
また、様々な職種に触れることで視野が広がる。

OGからの話題提供2
H.M.さん（2期生） 保育園勤務

＊本シンポジウムの実際では、OGの現在の職業の紹介や職種の専門性等の発表もありましたが、本報告では、学科DPに関わる提供のみを抜粋しています。

取得した資格

・幼稚園教諭一種免許状
・保育士資格
・特別支援学校教諭一種免許状

子ども支援学科で学んだこと

３本柱「子ども芸術・文化科目」を通して・・・
・自由に表現を表すことの楽しさ/心地よさ
・音がもたらすイメージ/想像の広がり
・同じ目標を持った仲間と何かに取り組むことの
　難しさ、楽しさ、その経験を通して得るもの

子ども支援学科を振り返って

今、大学での学びがどのようなことに生きているか

大学の授業の中で経験した実体験とは

・授業の中で保育の場面を想定し、どのように保育を進めるか学生同士で話し合う/発表する
・グループごとに考えた保育をロールプレイで実践してみる
・体験型の授業を通して、遊びを学ぶ（子どもの体育）
・「デイサービスつくし」で行った、音楽指導（ドレミパイプ）
・キャンパスの中にある自然観察
・佐藤ゼミでの音楽劇制作/発表　　etc…

- 実際に現場に出た時をイメージして、その子どもに合った関りを考える事が「全ての子どもの一人ひとりを深く理解し、持てる可能性を引き出すための的確な保育」をするヒントになる

- 自分で経験したことは、同じことを経験する子どもの気持ちがよく分かるので、どのように声掛け/支援をすればその子どもの可能性を伸ばすことが出来るのか想像しやすい

ディプロマポリシーを達成する為に
自分自身が経験することはとても大切な事だと感じた

具体的にどのようなことに生かせたのか？

お遊戯会

～内容～

「音楽劇　桃太郎」　男児6名　女児５名　計１１名

卒業論文に向けて、佐藤ゼミの仲間と作った「音楽劇　桃太郎」を基に制作した。

～何故、この内容でお遊戯会をやろうと考えたか～

・自由に表現を表すことの楽しさ/心地よさ
・音がもたらすイメージ/想像の広がり
・同じ目標を持った仲間と何かに取り組むことの難しさ、楽しさ、その経験を通して得るものを子ども達にも伝えたかったから

劇作りの中でどのように子ども達に伝えていったのか

自由に表現を表すことの楽しさ/心地よさ

＜大学＞

◇ピアノの音に合わせて体を動かしてみる。イメージを体で表現する。→自分が表した表現に「素敵だね」等肯定的な言葉を掛けてもらえると嬉しい。表現に間違いはないということ。

＜現場＞

◆劇に出てくる歌や台詞に合わせた踊りや動きを子ども達と一緒に考えた。→子ども達が思いついた表現(踊りや動き)を保育者や友達か「いいね！」「そうしよう！」と認めてもらえることで子ども達の表現に自信がつく。

音がもたらすイメージ/想像の広がり

＜大学＞

◇音楽劇作りにおいて、様々な楽器の音を鳴らしてイメージに合う音探しをし、友達と一緒に意見を交換しながら効果音をつけた。

→音によって、イメージの世界が何倍も鮮明になること、音の感じ方は人それぞれ違うことを感じた。

＜現場＞

◆劇中の効果音やピアノの強弱等にこだわって、子ども達の劇作りに参加した。

→効果音については、「これは何の音だと思う？」と質問しながら、子ども達が音に興味を持てるような関りを大切にした。

→ピアノの強弱にこだわる事で、子ども達の表現（台詞の言い方・表情）により広がりが見られた。

子ども支援学科がより良い学科になるよう、願いを込めて・・・

＜大学側へ＞
・大学内の施設において、学生達が考えた保育を実践する機会を増やす（かせいの森・デイサービスつくしで気軽に子ども達と関われる環境を整える）
・実習以外でも現場に出た時の日常の保育をより具体的にイメージし、子どもへの関りについて考える機会を増やす。
・支援を必要とする子どもに対して保育を行うときに使えそうな支援具を考え、良いところ・改善点など、意見を交換し合う。

＜学生さんへ＞
自分たちがやろうとすることに、こんなにも協力的になってくれる先生がいる大学ないと思います！先生たちと一緒に充実した大学生活を送って下さい！

OGからの話題提供3
K.M.さん（1期生）　病棟保育士

＊本シンポジウムの実際では、OGの現在の職業の紹介や職種の専門性等の発表もありましたが、本報告では、学科DPに関わる提供のみを抜粋しています。

病棟保育士として必要な専門性？

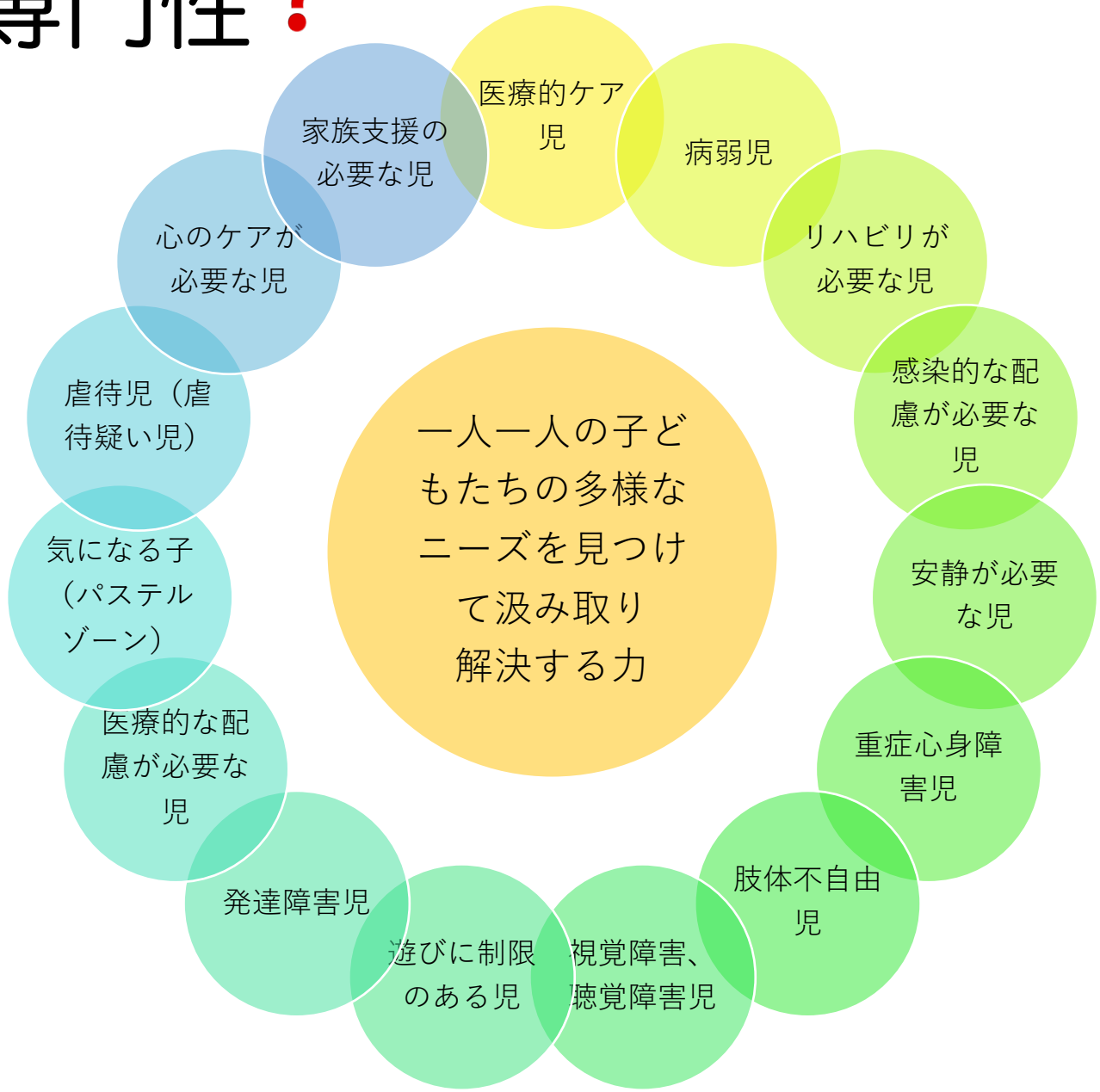
制限下での遊びの提供

生きる力を引き出す

ニーズを見極めるアセスメント力

子どもと家族のQOLの向上

子ども支援学科での学び



子ども支援学科での学びの役立ち

特別支援教育科目群
つくしのボランティア

視覚・聴覚障害児の病理
手話

美術・音楽を通した様々な遊び（個人的に学びが足りなかった）

ゼミナールでの見学実習

知的障害児の心理生理病理

短期的な関わりの中で臨機応変な対応

限られた場所や行動制限の中での遊びの提供

学童期の発達と関わり

社会的養護の必要な子どもとの関わり

精神疾患児との関わり

健康保育

小児疾患の知識
病児との関わり方

受動的な療養環境の中で生きる力を引き出すには🌿

学習や学校との連携

季節感を感じる行事

友人関係の構築

遊び🧩

スタッフとの信頼関係

母子分離のストレス解消

家族との関わり

基本的生活習慣の安定

否定的体験⇆肯定的体験

医療行為をしない保育士との関わりは安全基地

子ども支援とは

全ての子どもは豊かな愛情の中で心身ともに健やかに育てられ、尊重されなければならない

病院という場にいると、生きる意欲が低下している子どもや認められる経験の少ない子ども多く出会う…

全ての子どもが抱える隠れたニーズに目を向け、一人一人深く理解し安心できる環境の中で、持てる可能性を伸ばすことが必要不可欠である

最後に…

病院は子どもたちにとって非日常であり、苦痛な体験をするマイナスなイメージ！

治療に関わらず、子どもに寄り添い心の拠り所になることが保育士として大切である。日々の遊びや行事を通して、自己肯定感を上げると共に、少しでも笑顔やプラスになる体験を。

遊びは子どもの生きる力

学生との対話
グループワーク

子ども支援学科のDPのすべてに到達できていたら100点として、現在は総合的な評点では何点か？

最初にOGの皆さんにお聞きしたいと思います。

- 【K.M.さん】現時点での到達点として、保育士が6年目なので、70点以上いっていたいなと思うのですけれど、私自身、まだしてない経験もたくさんありますし、日々学びの中で今、勉強しながら仕事をしているっていう感じにはなるのですが、これは100点になることはないんじゃないかなと私は思っていて、常に学び続けて、いろんな子どもと出会う中で自分が学ぶこともあると思うし、その中で常に7割以上をキープしながら進んでいきたいなと思っています。

- 【H.M.さん】私も幼稚園教諭を4年間して、今保育士で初めて乳児と関わっており5年目になりますが、30点ぐらいかな思います。自分が子ども1人ひとりは深い理解をしてあげたいなとか、 持てる可能性を、この子の可能性を引き出すためにはどういうふうにしたらいいかなっていう思いを持ちながら、その子との実際の関わりを経験して、試行錯誤して、やっと、 こういう理解してあげた、保育実践ができたなっていうとこに繋がってくると思います。大学を卒業した当初は、子どもとの関わりは実習ぐらいでしたので、現場に出て、自分がディプロマポリシーを心の中に持ち続けながら、子どもと向き合っていけば、 ちょっとずつ上がってくるものじゃないかと私は感じました。

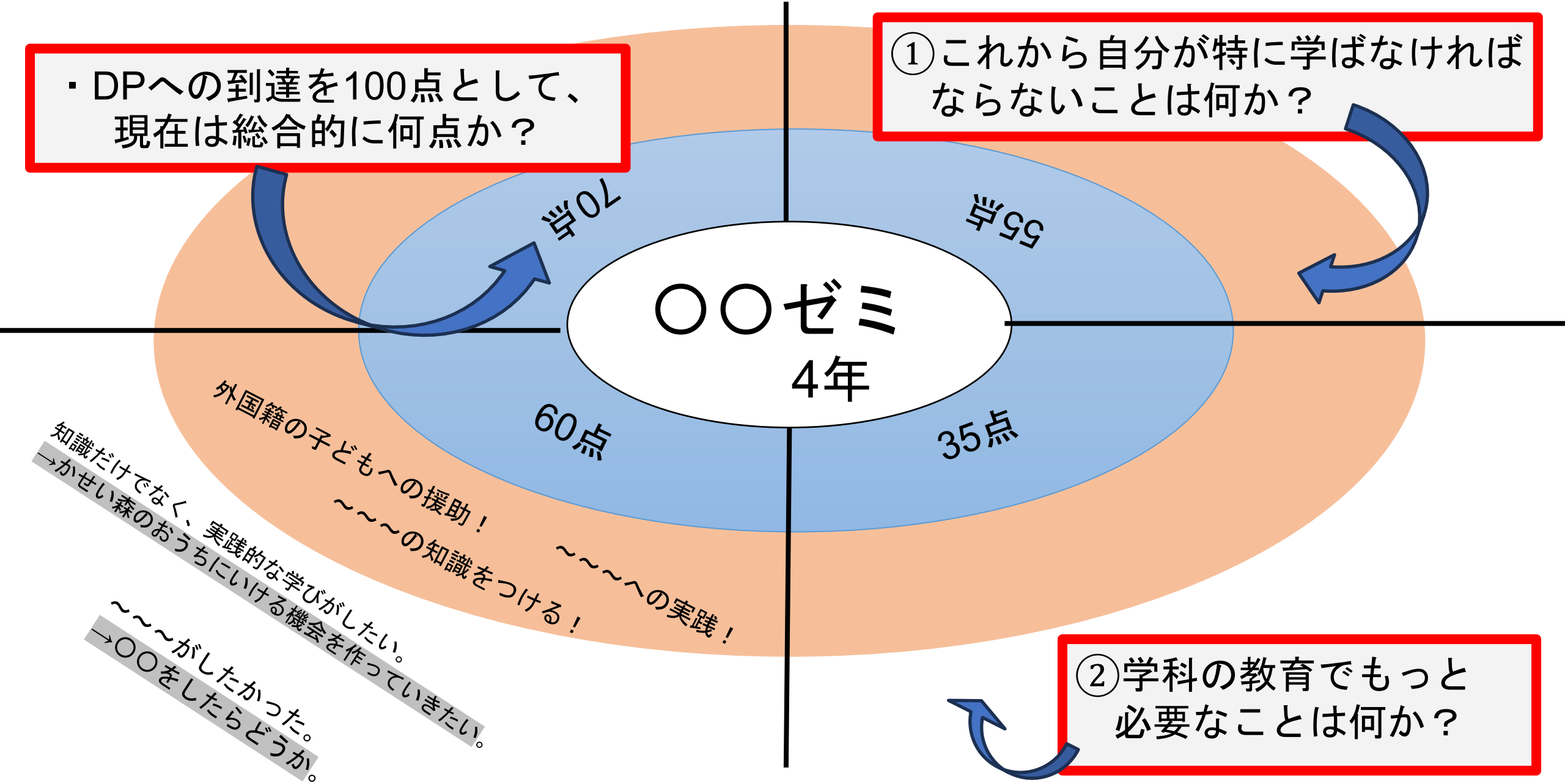
- 【N.K.さん】私は50％ぐらいかなと感じています。卒業後は3年間幼稚園に勤めていたのですが、その頃は、6割、7割ぐらいは 達成できていたかなという風に感じるのですけれども、今年から転職をしてまた違う分野で働いてみると、今まで100％が到達だと思ったのが、ゴールが遠くなってしまったように感じる部分もあり、ここからまた頑張っていきたいと思っています。

※記入例

各ゼミの学生グループワーク

・DPへの到達を100点として、
現在は総合的に何点か？

①これから自分が特に学ばなければ
ならないことは何か？



②学科の教育でもっと
必要なことは何か？

各ゼミのグループワーク結果

次に、いくつかのゼミに聞いてみたいと思います。①ゼミの皆さんは、点数の範囲で言うとだいたい何点代が多かったのか、点数の幅などがあったのかについて発表をお願いします。　②その点数を踏まえ、これから自分が特に学ばなければならないことと、学科の教育でもっと必要なことはどのようなことがあげられましたか。

宮島ゼミ　①1番低い点数が10点台で、高くても 30点でした。②第一に、子ども理解が足りないということです。先ほどご登壇していただいた卒業生のお話でもあったように、 1人ひとりの子どもの多様な力とかは、現場に出てみないとわからないので、実践が私たちには足りないのかなと思います。

細井ゼミ　①3年生は全員15点で、4年生は平均が30点前後です。②学ばなければならないことで、平均して挙がっているのが、グローバル化や英語力の向上、あとは授業で実践的に学びたいという意見が多くて、 2番のそれを踏まえての必要性として、座学の授業が多いので、その得た知識を実践として、ロールプレイングやアウトプットでしていきたいということと、障がい児への学びの制限、インクルーシブ保育に関することを学びたいということ、あと、就職先の話を1年生の時からしてほしいという意見が出ました。

保坂ゼミ　①大体10点から30点って低くて、 4年生がちょっと高くて35点から45点の間です。②3年生は、実践的経験が少ないと感じているのか、 支援経験に対する緊急時の対応とか、外国人の対応、グレーゾーンとの対応、4年生は、1人ひとりとても違っていて、視野の広さ、急な対応、集団の中での行動力と柔軟性など、今後もっと経験を積んでいきたいというのが多い。もっと実践的な学びをしたり、講義の中でロールプレイングをするなど、社会人としてまだまだ学びたいとか、就活系の講座が欲しいとか、卒業生の話を聴く機会がもっと欲しいとか、将来に向けて見えない部分を見ていきたいという意見がでました。

まとめと提言

本学科に在学し、保育者という夢に向かって日々学び続けている皆さんは、この学科への受験を決めた時の決意や当時の思いを今も覚えているでしょうか。もしかすると、今日の会を通して「子ども支援学科」を選び、この学科で学びたい！と強く思ったきっかけを改めて思い返した人も多いのではないかと思います。また、本学科のディプロマポリシーである、「全ての子どもの一人ひとりを深く理解し、持てる可能性を引き出すための的確な保育実践ができる保育専門職者」として、今の自分はどの程度到達できているのか、反対に、まだ足りていない学びは何かなども含め、本学科でしか培うことのできない学びの意義とその魅力を再認識することができたかと思います。

しかし、実際に学生からも挙がったように、もっと実践的な学びが必要なのではないか、特別支援の教育など３本柱はこれで良いのかなど、学科のコンセプトと学生が受け取っている感覚のギャップを踏まえると、本学科が特に取り組むべき課題は主に３つあるのではと考えました。

第一に、培った知識を実践として活かす状況が少ないという点です。本学科のディプロマポリシーでは、「全ての子どもの一人ひとりを深く理解し、持てる可能性を引き出すための、的確な保育実践ができる保育専門職者」と掲げてはいるものの、実際に、健康保育科目群や特別支援科目群、子ども芸術・文化科目群等の授業で培った知識を実践出来ている状況は少ないという指摘が挙げられました。健康保育科目群や特別支援科目群の授業では、確かに「診断名に左右されることなく、目の前の子ども一人ひとりが抱える、病気や障がいの特性の理解の重要性」ということを、本学科では学んでいます。しかし、実際に多様な支援を要する子ども一人ひとりと関わる場面や培った知識を実践してみるといった場面は、つくしでのボランティアや短期間の実習に限られており、的確な保育実践の力を目指すには、授業内も含め、理論や知識と実技・実践を繋ぐことがさらに求められると考えました

第二に、本学科が掲げる３本柱の孤立化と偏在化です。例えば、「自分は保育園で働くんだ」と決めている学生は、医療現場や施設で働きたいと考えている学生に比べ、特別支援科目群や健康保育科目群の履修科目が少なかったり、自分の得意なこと・興味のあるものだけを選び、その一つの科目群に特化をして学ぶなど、３本柱が孤立化しているように感じています。現実は、保育園に就職しても、施設や病院に就職をしても、多様な子どもがいるということに変わりはないと思います。そのような意味でも、３本柱を縦割りで孤立化させずに、それぞれの学びが繋がるようなカリキュラムを再編成しながら、「すべての子ども一人ひとり」を、本当に深く理解することのできる保育実践者を養成していくことが必要だと思いました。

第三に、教員が目指しているディプロマポリシーやカリキュラムポリシーと、学生が実際に学んでいて有意義だと思っている内容が異なっているという点です。本学科の３・４年生全員に向けて調査したアンケートでは、全ての授業で有意義だと思う科目ランキングで、３本柱に関する科目は、９位まで出てこないという結果でした。学生側としては、保育現場で活かせる「実践科目」に、有意義さを感じていることと思います。ただし、このように学生と教員の中での学びの求めと、結果にズレが生じているにも関わらず、的確な保育実践ができる保育専門職者になれる可能性では、半分を超える６０～７０％と答えた学生も多かったことから、学びの認識に差が生じているとも思います。

そのような意味でも、今日のこの会を初めとして、学生・教員お互いが、明日からの学業生活について、日々の学びの実際を常に吟味し、自身の将来と同時に、大学の未来像を見渡しながら、自己の学びと大学から得られる学び、双方への能動的な探求姿勢を常に持ち続けていかなければならないと思います。卒業と同時に、「子ども支援学科を選んで本当によかった」と、胸を貼って言うために、そして、保育者を目指す人たちが減少する中で、これから本学に学びを求めて入学してくるであろう近未来の本学科生にも、“東京家政大学子ども支援学科にしかない魅力”を、私たち自身がこれから誇りを持って発信していきたいと強く思います。

以上、学生からのまとめと提言とさせていただきます。

子ども支援学科長のことば

あとがきにかえて

今回、本シンポジウムの企画運営を担当してくださった和田ゼミの皆さんから、具体的な「提言書」をいただきました。このことについて考えていきたいと思います。

まず第一に、「培った知識を実践として活かす状況が少ない」というご意見です。世界中を不測の事態に陥れたCOVID-19のウィルス蔓延により、少なくとも2020年、2021年の２年間はほとんどの行動制限がかけられ、保育現場や施設、医療現場での実習や保育実践、ボランティアを体験する機会を得られたかったことは、仕方のないことではありましたが、皆さんにとって大変厳しい状況であったと思います。学内施設においてもしばらくはボランティアなどが出来ない状況でしたが、2022年度から徐々に現場体験の機会を設けていただき、現在では、かせい森のおうち、かせい森の放課後デイサービスつくしでのボランティアの受け入れを実施していただいており、特に「つくし」のボランティアは年間のべ500名以上の参加があります。かせい森のおうちのボランティアについても、更に多くのボランティアを受け入れていただけるよう整備中ですので、皆さんの意欲が叶うように環境を整えていきたいと思います。一部の授業やゼミ等でも可能な限り保育実践やボランティア活動を取り入れられるよう工夫していますが、なかなか学生全員が参加できる体制が整えられないのが現状の課題といえます。しかし、一般的に免許・資格関連の法令科目での実習時間は定められており、それ以上に本学の施設を活用してさまざまな子どもたちと関われる環境を開いてますので、今後は学生の皆さんにも積極的に参加いただければと思います。また学外施設でのボランティア等の募集や受け入れ情報も常に提供されています。一部の学生の積極的なボランティア報告も受けています。皆さんも主体的に実践の機会を得られる努力をしていただければ、チャンスは広がってくるでしょう。

第二に「本学科が掲げる3本柱の孤立化と偏在化」についてですが、本学科は、DPを具現化するために、幼稚園教諭、保育士を原則取得とした上で、特色的な３つの科目群を設置しているわけですが、大学制度、卒業要件、法令課程との兼ね合いの中で、オリジナリティを持った教育プログラムを構成する限界もあるといえるでしょう。本学科は、独自に定める必修科目として「子ども学総論」「子ども支援論」「特別支援教育概論」「健康保育総論」といったDPに関わる重要科目を設置しています。また法令科目においてもシラバスに各DPとの関連を示しており、教授内容に融合された形になっていると思います。その他の科目群については選択科目となっておりますが、こちらは学生の自由意志で選択するものですので、皆さんの自主性に委ねられていると言えます。「孤立化」との指摘がありましたが、決して専攻制、コース制を取っているわけでもありませんので、一部の履修ルールはありますが、科目のほとんどは任意に履修できますし、中には、ほぼ全ての科目を履修している学生もおり、孤立化するカリキュラム構成ではありません。

しかし、そのように学生さんが「孤立化・偏在化」と認識してしまう、あるいは感じてしまう要因もあるでしょうし、これらを横断的、俯瞰的、総合的に捉える科目も最終年度等に設定する必要もあるかもしれません。法令科目として求められる教授内容、卒業単位数の上に、独自の選択科目が設定されていることの課題はもちろんありますし、こうした科目群がDPの要件に含まれている点については、学科としても重要な課題として検討していきたいと思います。

•第三に、「教員が目指しているディプロマポリシーやカリキュラムポリシーと、学生が実際に学んで有意義だと思っている内容が異なる」という点です。上記で説明してきたように、本来であれば、本学科の教育課程に、意義のない科目は設置していないはずです。教育課程には、基礎教養科目と専門教育科目があり、基礎教養科目では、「豊かな人間形成と教養を養うための基礎を身につけるための科目」が構成されており、専門教育科目では、「子ども支援に係る教育者・保育者としての専門性を保証するための科目群」で構成された内容となっています。これらの科目群にはそれぞれ教育の目的があり、４年制大学生として身につけるべき基礎力と、保育者として身につけるべき専門者教育のそれぞれの意図や位置付けを汲み取った上で履修していただく必要があるかと思います。その上で、皆さんが履修して有意義だと感じた科目の順位を挙げていただいたものについて、どのように捉えてよいかは難しい点ですが、ひとつの結果として受け止めていきたいと思います。基礎教養科目が上位に挙げられたことは、ある意味大学生として必要な能力として捉えていただている証かもしれません。学生時代にその意義の即効性を感じられない科目もあるかもしれませんが、卒後に保育実践者として、またもっと後に保育者としての経験を積んだ上で重要であったことを理解していただける科目もあるかもしれません。あるいは教授法や内容について課題がある場合は、本学で全ての科目の終了時に「授業アンケート」を実施しておりますので、学生評価としてさまざまなご意見をいただきながら改善の検討を教員それぞれが図っていけるよう努力していきたいと思います。

　また、キャンパスについて、大学設備についてもさまざまなご意見をいただきました。こうした学生さんの生のご意見は、本学としてもひとつずつ検討しているよう、機会がありましたら伝えていきたいと思います。

おわりに

大学が自校の教育体制を自己点検し、現状を正確に把握・認識した上で自己評価し、改善し続けることが学校教育法に規定されました。この中で教職員による取り組みのみならず、その中心にいる学生の皆さんからこのような企画を立案して、議論し、声を上げていただけたことは、本学科の宝ともなるものであると思います。

本学科のDPを真剣に捉えて、自らの学修成果を見つめ、どのような力が身につき、どのような力の獲得が課題なのか、皆さんと一緒に考える時間を頂けたこの機会に感謝し、今後の子ども支援学科のDPの精査と教育の質向上に向けて尽力していきたいと思います。

最後に、本シンポジウムの企画・運営にあたってくださった和田明人先生、和田ゼミの皆さん、そして、登壇してくださった卒業生OG、ご参加くださった本学科４年生、３年生、また在学生、外部の方すべてに改めて感謝を申し上げます。